

蒐集家という奴は大抵において第三者には理解され辛いものである。なにせただ集めるだけに飽き足らず、当人それぞれのユニークな拘りと言うものが反映されるからだ。

香霖堂など良い例だろう。まず売れない物をわざわざ集めて陳列しているのだから。

ただ、だからと言って香霖堂の売れない品々が何の役にも立っていないかと言うとそうではない。店主の眼鏡に適った幻想郷では役に立たない品々は、香霖堂という空間を形成するのに役立ち、そしてそれを良しとする店主の有り様をも示している。

当然第三者はそんな所まで考える前に理解しようとする努力を放棄するし、そこまで分かってても呆れるばかりで理解できない。尚言えば理解されない事を当人が理解できなかったり、理解される事を諦めていたりとかもある。

そこから考えるに、マジックアイテムを必要不要に関わらず取り敢えず手当たり次第に貰っていく、という方針を持つ魔法の森の普通の魔法使いは、蒐集家としてはまだ生温い方なだろう。やり方とはかく何故そうするかについては、知的好奇心と探求心の無い魔法使い等しい以上、理解が容易い。勿論一部からは納得できないとの非難も上がるが。

さてさて、そして、そして。

理解されない方の蒐集家が旧地獄にも。

「えいやつとつとーえいやつとー」

がらごろと猫車の車輪は回り、彩の無い殺風景な荒れ地に轍を作って行く。その轍に付いて

行くようにして一組の足跡も踏み締められ、やがて荒地地から焦土へ至る。

一旦いったん一息ついた火焰猫燐は、猫車に載せられた死体を見た。

母の中で出産の時を待つ胎児の様に身を丸めているその死体は、全身が焼け焦げて骨が所々覗のぞくなんとも立派な焼死体。それも一昨日かっばらってきた割と新鮮な奴である。大きさからして大人、また頭蓋ずがいか骨盤を少し調べれば男女も容易に分かるが、燐はそんな事をせずとも死体の性別を知る事が出来た。

何せ死体が喋るのを聞いていたのだ。

勿論もちろん聞いた内容は性別のみならず、名前に家族に住まいに明日の用事に職場の愚痴にと多岐に渡る。生前、他者に殺されるなどして余程強く自分の死に直面し、自分の死を強く意識した者でもなければ、死体なのに色々な事を活き活きと語るのだ。

そして活き活きと語られるのを聞く事を燐は面白く感じていた。既に死んでいると言うのにその事実を全く無視し、色んな話を語る様は滑稽こけいが過ぎる。

今運んでいる焼死体などは、生きている内に焼かれたのか死んでから焼かれたのが本人にとつてもあやふやだったらしく、しきりに「ところで今は夏だっけ？ ばかに暑いなあ」なんてとつくに死んでいるのに暑がるものだから燐としては笑いを堪こえるのに大変苦労した。

ちなみにそこで堪え切れずに笑ってしまおうと、流石に死者も気を悪くするのか黙ってしまう。そうなる自分はどうなってしまうたかについての考えを巡らすようになり、やがて二度と喋

らなくなるのだ。

そうなたら隣にとってその死体への興味はゼロになる。

なのでこうして死体を運び、旧地獄は灼熱地獄跡の適当な場所に捨てようと言う訳だ。跡地と言えども死体焼却には困らないし、残った怨霊は自分の好きに使役すれば済む。自分の手下としてしまえば笑ってしまつた事についてとやかく言われる事も無い。

「えいやつとつとーえいやつとー♪」

止まっていた足取りは再開し、再び一本の轍と一組の足跡が続いて行く。

「ああー、何かこう良い死体っていうのは無いものかねえ」

隣の蒐集物である死体は、自然発生した物に限るという拘りを持つていた。その理由は前述の通り活き活きと語られる内容を聞く為だが、流石の幻想郷とはいえそう易々と自然死体は手に入らない。野垂れ死にの場合遺体どころか骨も残らない場合があったり、行きずりの者に埋葬されたりしてしまう。

ならば天寿を全うした者の通夜葬式が狙い目ではあるのだが、その中でも特に素晴らしい老人の死体などはやはり遺族のガードが固い。年寄りには長生きした分様々な物を見聞きする為、それをしつかり子孫に伝えていけば、遺体の傍で寝ずの番をする者の一人や二人は当たり前のようにいるのだ。ただその分、巧い事ゲットできれば様々な話を聞く事ができるので、暫しの間愉しめる。ちなみに老人が生前呆けていようがいまいが、それは肉体の方の支障からなので

殆ど関係は無い。

「て言うより、良し悪しでなく希少価値の方……？」

眩き、首を傾げる。

「となると普通じゃない死体……いや普通の死体とは一体……」

哲学的な方向へ傾きつつある中、二尾がゆらゆらと絡まりそうな程複雑に揺れ動く。

「普通の死体ってやっぱりありきたりな死体だから、ありきたりじゃない死体って言うとき普通じゃない死体になる訳で、そうになると生前から普通じゃなければ普通じゃない死体って事になる……あ、なった。そっかー成る程なー」

天啓が閃いたかのように得られた答えに尻尾の動きは止まり、隣はにやつと笑う。自分の求める物の答えを得られると言うのは素晴らしい。

「と、なるとー……生前から普通じゃないー……にーんげーんにーんげーん……おおう」

知ってる人間を何人か想い浮かべようとして、隣は初っ端から普通じゃないのに思い至った。でもすぐに別のにしようと考え、脇へ退かす。

流石に、博麗の巫女の死体なんて極上なのは当然無理だろう。勝てなかつたし。それに死んだとしてその死体を手に入れる為の労力たるや……割とあっさり手に入るかも知れないが……。

「いやいやいんや……」

脇へ傾きかけた思考を振り払わんと首を左右に何度か振って、思考検索を再開する。

5 サンプル

空を往く一羽の鳥。

悠然と空を舞い、夕陽に向かって飛んでいく姿を、何とはなしに目で追った。

この辺りではあまり見たことのない種だ。渡り鳥だろうか？ いや、もしかしたら最近幻想入りしたのかもしれない。朱鷺のように。だとしたら、いずれ幻想郷の空はあの鳥で埋め尽くされるのかもしれない。現在は一羽しかいなくても、外の世界で滅んだのだとしたら一気に雪崩れ込んでくるはずだ。鳥たちとの縄張り争いで、また騒がしくなるのかもしれない。

暇で、やる事がないと無駄な思考に歯止めが効かない。

とはいえ、思考くらいしかすることがないのが今の私だ。

胴から下は千切れ、左腕も何処かに落としてきた。そして何より抉られた心臓がまだ再生していない。折角右腕と首は無事なのに、心臓が止まっただけで指一本動かせなくなるのだから不思議なものだ。おかげで夕陽が眩しくて仕方ないのに、顔を背けることもできない。厄介だ。ともすればこれも輝夜の嫌がらせではないかと邪推してしまう。

その輝夜も、何処かその辺に転がっているだろうが。

顔を念入りに焼いてやったから、しばらくは夕陽を眺めることも叶うまい。ざまあみろ。

朝から庵にやってきて、「今日こそ決着をつけるわよ！」とか何とか言いつついきなり襲ってきた。それからいつも通りの弾幕ごっこが始まって、今は仲良くダブルノックダウンだ。輝夜との喧嘩も四桁を超えると、もはや惰性というか挨拶のようなものになっていて、今では日

常の一つに組み込まれている。

これは——墮落だらくだろうか。

父の無念や過去の因縁も、あれほど燃え盛っていた私の中の炎も、随分ずいぶんと薄れてしまった。殴られたら殴り返すくらいのは気力は残っているが、それもいつまで続くものか。

平和で、刺激的な、幻想郷の日常。

あまりにも心地よくて、だからこそ時に全てを投げ捨て、何処どこか遠くの知らない場所へ飛んでみたくなる。

「飛びたいなら……飛べばいいじゃないか」

ふいに転がり出た自分の言葉に、思わず目を丸くする。

咀嚼そしやくし、飲みこんで、胃の腑ふに落ちたその言葉を、何度も反芻はんそうする。

私には翼がある。

何処までも飛んでいける、紅蓮ぐれんの翼。

思わず笑ってしまう。そんな簡単なことを今の今まで思いつきもしなかったって。

「まあ、それもこれも復活してからの話さ」

今の私は翼どころか指一本動かせない。

眩い夕陽に顔を背けることもできない。

やがて夜が来る。傷も朝には癒えるだろう。

だからそれまで——おやすみなさい。

S

腕の痺れに耐えかねて、ゆっくりと身を起こす。

机に突っ伏したまま長時間頭部を支え続けた健気な両腕は、指先から肘まで全く感覚のないまま痙攣している。しびびつてる。自分の腕の筈なのに、まるで実感の湧かない異物のような指先を、寝起きのしゃっきりしない頭でぼんやりと見つめた。ブレザーの袖口に涎の染み発見。ふと俯いて机を見れば、教科書とノートに結構な量の水たまりが出来ていた。口元を拭いたいがまだ両腕はいう事を聞かない。もどかしい。

……って、いや、ちよつと待て。

——ブレザー？ ——教科書？ ——ノート？

未だに仕事しようとしなほんくら頭で周囲を見渡すと、いつの間に放課後になったのか、クラスの中に人影はない。窓の外はすでに赤く、運動部の掛け声が遠くに聞こえる。

——クラス？ ——教室？ ——運動部？

何だろう、私は酷く混乱している。だけど何故混乱しているのか、いや、何が解らないのか解らない。私は——

「何だ、まだ帰っていなかったのか？ そろそろ下校時刻だぞ」
聞き慣れた声に振り返ると、教室の後ろの扉から慧音が顔を覗かせていた。

「——けい、ね？」

「うん？ どうした、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をして。おいおい、口から涎が垂れているじゃないか。全く……：だらしのないな、ほれ」

混乱したままの私につかつかと歩み寄り、スカートのポケットから取り出したハンカチで私の口元を拭ってくれる慧音。私と同じ紺のブレザーで、白いブラウスと赤いネクタイで、紺のジャンパースカートで、何もおかしいところはない筈なのに、何だかとてもない違和感に苛まれる。

「さ、帰るぞ。今日はヤマダ屋で玉子が半額なのだ。お一人様一パックだから、おまえにも付き合って貰わないと困る。ほらほら早く支度しろ」

慧音に急かされ、ようやく動くようになった両手を使いながら、鞆の中に教科書やノートをつっ込む。涎の染みが気になるが、まあ、そのうち乾くだろう。そういえば今日は帰りにスーパーに寄るつもりでエコバッグを持ってきたんだ。早くしないと玉子が売り切れてしまう、慧音に急かされるまでもなく急がねばならない。

慧音に続いて教室を出ようとし、ふと気になって振り返った。

いつもの教室。いつもの黒板。いつもの風景。

ぎしり、と天井が鳴った。

暫く置いて、もう一度。

ああ、冬の音だ——などと思ったところで、藤原妹紅は随分と長い間意識を手放していた事に気が付いた。

眠っていた訳でもなく、気絶していた訳でもなく。床に寝転がって呆と天井を眺めていたまま、固まってしまった指先を動かそうとすると、こちらも同じように肉と骨が軋んだ。

その固まり具合と、三度頭上から響いた重たい音に、数日は経っているだろうとあたりを付ける。

ぎぎ、と錆びた鉄を擦るように首を動かすと、硝子をはめ込んだ小さな明かり取りが淡く白に染まっていた。

「……埋まつてるかな」

漏れたのは、自分のものとは思えない嘎れた老婆のような声。

一瞬驚きはしたものの、数日の間飲まず食わずだったのだから、喉が嘎れているのも当然である。

「——！」

だが、久しぶりに出した声はまるで爪先で嘎れた喉を引っ掻くようで、その痛みに思わず手足を動かすと、今度は間接が悲鳴を上げるといふ連鎖。そうして全身を内外から襲う痛みにご

ろごろと悶え転がっていると、ゴン、と額に衝撃を受けた。

次はなんだと額をさすりながらぶつかつた方を見ると、床から天井へと聳えるように伸びる、少し太めの木の棒が一本。ふと何かに気付いて周りを見てみると、同じように何本か、幹を切り取ってそのまま持つてきたような木が立ち並んでいる。

「……なんだこれ」

幾分若さを取り戻した声で呟いたところで、妹紅は「あ」と数日前の出来事を思い出した。

長年の経験と勘から今年は雪が酷くなると思い、万が一呆けたまま意識を手放すような事になつた場合、生き埋めになるのだけは避けようと補強をしていたのだ。

そもそもを説明するならば、輝夜が悪い。

幻想郷に来てから、というよりは蓬莱山輝夜と再会してからは多少日々が賑やかになっていたものの、冬場は双方共に大人しくしている事が多く、特に輝夜は寒いのが嫌いなのか滅多に出てこない。輝夜が出てこなければ妹紅も自然と外に出る事が少なくなり、いつの間にか起きていなくても寝ているでもない、そんな状態を保つという特技まで身につけてしまった。輝夜が悪い。

「しかしまあ、こうも見事に埋まるとはね」

天井の軋み、明かり取りから見える状態からして、恐らくはすっぽりと埋まってしまっている。逆にそのおかげなのか思ったほど寒くはないものの、さてどうしたものかと一考。

埋まっている以上外に出る事は難しい。かといつてもう一度意識を手放そうにも、特技とはいえ意識して出来るものではないのでこれも難しい。それに絶食していた所為か、すつかりと目覚めた体はしきりに空腹を訴えている。もちろん食料はほとんど無い。どれもこれも輝夜が悪い。

とりあえずごろごろと転がって空腹を紛らわせるも、転がりすぎたのか別の柱にまた額をぶつけた。当然輝夜が悪い。

「次に会ったら三十三、四回くらいは息の根を止めてやる……！」

そんな恨み言と共に、八つ当たりするように柱にデコピンを一発。

「うん？」

幾分気が晴れた妹紅が改めて仰向けになると、気の所為か天井がぎりぎり、ではなくみしり、と鳴っているように聞こえた。それも割と連続的に。

これはダメかもしれない、と思いつながらも、何故か頭の中ではぎりりとみしりの違いについて考えていて、そしてその答えが出るより先に、一体何が原因なのか、先程妹紅がデコピンを当てた柱代わりの幹が不吉な音と共に中程で見事に折れた。

「あ」

それが引き金になったのか、他の柱も次々と折れ、倒れ、その都度天井の悲鳴が大きくなっていく。